

筑後川の悠久の流れとともに ～水と緑の人間都市 久留米～

はじめに

久留米市は、福岡県南部の中核都市で、九州自動車道と大分・長崎自動車道のクロスポイントにも近く、古くから交通の要衝となっています。市の北東部から西部にかけて、阿蘇山を源とする九州一の大河・筑後川が貫流し、多くの支川を集めながら、有明海にかけて形成された広大な筑後平野を潤しています。

久留米市は、ゴム関連産業を中心に古くから工業都市として栄え、近年では自動車関連産業の集積が進んでいます。また、全国トップレベルの医師数と医療機関が集積した高度医療都市でもあり、最先端のガンワクチン研究など、バイオ関連産業が多く集積しています。

治水と利水の歴史

筑後川はかつて、洪水により一夜でその様相が変わることから「一夜川」とも呼ばれ、特に昭和28年6月の大洪水では、死者147名、被災者数54万人余に達する大災害をもたらしました。

この大洪水を受け、筑後川本川にダム建設、堤防の

引堤計画等の治水事業が本格化されたことにより、「これまで経験したことのなかったような大雨」と表現された平成24年7月の九州北部豪雨においては、市内の一部地域において被害があったものの、甚大な被害は免れることができました。

一方、流域では昭和53年と平成6年には記録的な渇水に見舞われ、福岡市などでは長期間に渡る給水制限が実施されましたが、筑後川に水源を持つ久留米市は幸い給水制限には至りませんでした。

筑後川流域及び福岡都市圏に必要な都市用水として、「筑後川水系における水資源開発基本計画」に基づき、筑後川上流に江川ダム、寺内ダムの建設が進められるとともに、福岡導水及び筑後大堰の完成により、福岡都市圏で使用する水の約30%に相当する送水を開始しました。

現在、筑後川水系では、平成5年の合所ダム、平成25年の大山ダムに続き、平成31年度の完成を目指して小石原川こいしわらがわダムの建設が順調に進められています。



自然の恵みを活かした観光

久留米市は、筑後川の4大井堰の一つである恵利堰をはじめ、先人の知恵と努力による筑後平野の水利事業により肥沃な大地が開けています。その恩恵のもと、多種多様な農業が営まれ、久留米市は福岡県内最大の農産生産を誇る農業都市でもあります。それらの豊富な農産物を活かして、久留米市東部を中心に、ぶどうやいちご、柿、いちじくなどのフルーツ狩りが1年を通して楽しめ、国内外から多くの観光客が訪れています。



また、久留米は筑後川の豊かな水と美しい大粒の筑後米や水運の利点を生かし、古くから酒造りが盛んでした。兵庫の灘、京都の伏見、広島ของ西条と並ぶ酒処といわれ、市内には17もの酒蔵が集積しています。毎年2月中旬に開催される「城島酒蔵びらき」をはじめ、市内の各酒蔵が蔵を開放するなど、新酒を楽しむ催しが開催され、多くの人で賑わいます。



圏域の中核都市として、更なる発展を目指して

平成28年4月に、文化芸術振興の拠点、広域交流促進の拠点、六ツ門地区（市中心部）の商業の拠点、そして賑わい交流の拠点としての重要な役割を担う戦略的拠点施設である「久留米シティプラザ」が久留米市中心市街地の六ツ門地区にオープンしました。1,500席を超える客席を持つザ・グランドホールや、中規模ホール「久留米座」、屋根付きの全天候型イベントスペース「六角堂広場」のほか会議室や展示場など多彩な機能を有しています。

久留米シティプラザが持つ最先端・高規格の施設において、上質で多様な文化芸術を提供するとともに、地域と融合した賑わい作り、学会等の誘致とアフターコンベンションにより、久留米市はもとより筑後川流域の周辺自治体をはじめ、圏域の交流人口の増加や地域産業の振興等につなげていきます。



おわりに

筑後川は地域のシンボルであり、筑後川流域に留まらず、福岡都市圏に住む人々にとっても、日常の生活や経済活動にとって欠かすことのできない貴重な資源です。これからも筑後川の水を守り、次の世代にしっかりと引き継ぐことが私たちに課せられた責務であると考えています。